



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4193号 2018.2.4 発行



ぱりまる アレルギー配慮の菓子 愛知の知的障害者作る 毎日新聞 2018年2月3日

「子どもたちのために」と焼き上げた「ぱりまる」を袋詰めする障害者ら＝愛知県高浜市の授産所高浜安立で2018年1月19日、長倉正知撮影

東日本大震災の被災地、岩手県陸前高田市の子どもたちに送るため、愛知県高浜市向山町の知的障害者通所施設「授産所高浜安立（あんりゅう）」で、今年も焼き菓子の「ぱりまる」作りが始まった。アレルギーにも配慮したもので、「世の中の役に立ちたい」という障害者たちの思いが込められている。

「ぱりまる」はせんべいのようなお菓子で、食物アレルギーを起こす特定原材料7品目（卵、牛乳、小麦粉など）を除いて製造している。食物アレルギー対策で実績のある愛知文教女子短大（愛知県稲沢市）がレシピ作りで協力し、アレルギーの子ども、そうでない子どもと一緒に食べられるようにした。知的障害者9人の高浜安立の工場だけで作

られている。

司法面接 試行錯誤 虐待判断分かれる現場

毎日新聞 2018年2月4日
児童相談所・警察 男児証言共に聞き

司法面接のイメージ



大阪市淀川区の自宅で男児（4）にけがをさせたとして義父（33）が傷害容疑で逮捕された事件で、市こども相談センター（児童相談所）や大阪府警が、一時保護された男児から一緒に話を聞いた「司法面接」を巡り、暴力の有無についての両者の見解が食い違っている。センター

は「あざができた経緯がはっきりしない」と判断、府警は「パパにやられた」との趣旨の証言を得たとしており、被害聴取や対応の難しさが浮き彫りになった。

府警によると、男児は母親と義父、弟との4人暮らし。昨年6月以降、保育所などであざが見つかる度に一時保護と解除が繰り返され、義父が1月24日に逮捕されるまでに保

護は5回に上る。

4回目の一時保護となった昨年12月9日、センターと府警、大阪地検が、男児の心理的負担を軽減し、信用性を確保するため、共同の司法面接を実施。検事が代表して、過去に見つかったあざなどを含めて男児に経緯を尋ねた。録音・録画され、内容は検事が文書にまとめたという。

捜査関係者によると、府警は男児が幼少だったことを考慮しても「パパにやられた」と、暴行を受けた趣旨で証言していると判断。センターは男児の証言内容を明らかにしていないが、取材に「そのような証言はなかった」と答えており、12月末に一時保護を解除、男児は親元に帰った。

しかし、1月4日に男児のあざがまたも見つかると、センターが翌日再び保護。府警は男児の証言を精査するなどして24日、昨年9月に自宅で当時3歳だった男児に暴行を加え、右頬に打撲などの軽傷を負わせたとして義父を逮捕した。義父は容疑を否認している。

センターの虐待対応担当者は帰宅の判断について取材に「あざの経緯がはっきりせず、父親も関与を否定している。リスクが高い事案と認識していたが、総合的に判断した」と説明。府警とは面接の内容を別々に記録しているとした上で「虐待を受けていたという趣旨の発言をした記録はない。府警とは見解の相違がある」と話し、対応に問題がなかったとの認識を示している。

一方、ある捜査関係者は「何度も保護しているので虐待は明らかだ。最悪の事態が起きてから動くのでは遅い」と話している。【山田毅、村田拓也】

ことば【司法面接】

検察、警察、児童相談所が、虐待を受けた児童から繰り返し話を聞くことで事件を再体験させる2次被害を防ぐ目的で、代表者が原則1回の面接で聞き取る方法。厚生労働省と警察庁、最高検が2015年10月に児相、警察、検察が連携を強化するよう通知を出し、本格的に行われるようになっていく。

3機関を代表した1人が行う面接は特に「協同面接」と呼ばれる。関係者は別室のモニターで観察でき、通常録音・録画もされる。誘導的な質問は避け、自由に答えられるようにするなど、子供の特性や気持ちに配慮することが求められる。

一方、録音・録画や、文書による記録を3者でどう共有するかなど、具体的な実施方法について明確な取り決めはない。

【映画深層】スイス・仏合作の社会派人形アニメ「ぼくの名前はズッキーニ」 原点は日本のあの名作



産経新聞 2018年2月3日
ストップモーション・アニメーション映画「ぼくの名前はズッキーニ」の1場面 (C) RITA PRODUCTIONS / BLUE SPIRIT PRODUCTIONS / GEBEKA FILMS / KNM / RTS SSR / FRANCE 3 CINEMA / RHONES-ALPES CINEMA / HELIUM FILMS / 2016

人形を1コマ1コマ動かして撮影するストップモーション・アニメーションといえば、英国の「ひつじのショー」やロシアの「チェブラーシカ」など、ほのぼのと



したお話おなじみ

という人も多いだろう。だが2月10日公開のスイス・フランス合作「ぼくの名前はズッキーニ」は、児童虐待や育児放棄といった厳しい現実社会をテーマに扱っている。昨年の米

アカデミー賞長編アニメーション部門にノミネートされるなど、世界中で評判を呼んでいるが、来日したスイス出身のクロード・バラス監督（45）は「製作資金の調達が大きな

挑戦だった」と打ち明ける。

孤児院の子供たちを描く



この作品はフランスの作家、ジル・パリスの児童文学を原作にしている。飲んだくれて怒ってばかりいる母親と2人暮らしの少年、イカールは、母親からズッキーニ（フランス語だとクルジェット=courgette）と呼ばれていた。酒に酔った際の事故で母親を失った彼は、警察官のレイモンによって孤児院のフォンテーヌ園に預けられる。ドラッグ中毒や不法滞在の外国人など、さまざまな問題を抱えた家族と離れて過ごすクラスメートとともに、徐々に寂しさを紛らわせていくズッキーニだったが、そんな彼の前に新たな入園者のカミーユが現れる。

扶養手当日当てにめいを引き取りたいと乗り込んでくるカミーユの叔母との攻防など、子供たちの生き生きとした描写が、大きな目の愛らしい人形によるぬくもりある動きで表現される。

扶養手当日当てにめいを引き取りたいと乗り込んでくるカミーユの叔母との攻防など、子供たちの生き生きとした描写が、大きな目の愛らしい人形によるぬくもりある動きで表現される。

バラス監督が原作を読んだのは約10年前だったが、そのとき、子供のころに放送されたあるテレビアニメを見たときの感激がよみがえったという。若かりし頃の宮崎駿監督（77）や高畑勲監督（82）が参加した日本のテレビシリーズ「アルプスの少女ハイジ」だった。

「ああいうアニメーションを作りたいと、この本を原作に映画化することを思いついたが、プロデューサーやスポンサーを探すのは大変でした。ヨーロッパではこういう社会の現実を描いた子供向け作品というのは少ないですからね」とバラス監督は指摘する。

寂しさや怒りを光で表現

資金調達と並行して、まずはシナリオ作成から着手した。途中から映画「トムボーイ」（2011年）などの監督として知られるフランスのセリーヌ・シアマ（39）が参加したおかげで、さまざまな感情をバランスよく書けたと振り返る。

そのシナリオをもとに子供たちに実際に演じてもらい、そのときに感情を込めるのが難しい言葉が出てきたら別の表現に換えるなどして、もう一度シナリオを練り直した。こうして録音した子供たちの声に合わせて、人形を1コマずつ動かしては撮影していった。

「その段階では、もっとせりふの量が多かった。撮影しながらどんどんそいでいって、基本的な言葉だけを残したんです。例えば表情が乏しい人が何かの拍子にふっと笑ったら、その笑顔はものすごく大きなインパクトを伴って伝わる。同様に言葉を極力少なくすることで、いざというときの感情表現に努めました」

さらに絶妙なのが光と影の使い方だ。部屋に差し込むこの影など、ズッキーニたち登場人物の心情が見事に表現されているが、コンピューター上で処理するCGアニメとは異なり、ストップモーション・アニメーションはセットを組み、実際に照明を当ててカメラで撮影する。撮影担当のダヴィッド・トゥトヴォワとはこれまでも短編を何本も一緒に手がけており、この作品の意図をきちんと理解してくれていたという。

「どんな複雑な場面でも光を当てる方向は1つで、いろんな方向から当てることはしない。その1本の光に対し、周りにもものを置いたり反射光を使ったりして立体感を出すというのが、彼のやり方です。シーンシーンで流れる感情は、ときには寂しさだったり、怒りだったりする。その感情を光で表現するというのはとても重要だし、特にこの映画には必要でした」

太っちょでかわいらしい

スイス南西部のシエールで生まれたバラス監督にとって強烈な記憶にあるストップモーション・アニメーションは、チェコのアニメーション作家、イジー・トルンカ（1912～69年）の「手」（65年）という短編だ。10歳のころ、テレビで放送されたのを見たが、政治的なメッセージが内包されていたこの作品にいつか引きつけられた。後で母

親から聞いた話では、見た直後に「大きくなったらこんな仕事をしたい」と断言したそうだ。

だが進学した美術学校では、イラストに続いてCGを専攻する。

「当時はCGの全盛時代で、みんながCGを勉強していた。技術を身につけておくのも必要だと思ってCGを学んだが、その後、ストップモーション・アニメーションの企画に参加することになり、CGよりもこっちの方が面白いと感じたんです」

バラス監督によると、ストップモーション・アニメーションは、数あるアニメーションの中でも制御が困難だという。1秒の映像に12コマを要するが、いったん撮ったものは後戻りさせることができない。

「動きはCGの方がスムーズでリアルで、だから派手なアクションやスーパーヒーローものを撮るには適している。何回もやり直しが利くので、制御しようと思えばいくらでも制御できる。対してストップモーションは、動きはぎこちないし、だからこそ今回の作品のようなストーリーには合っていると思う。多様な感情を表現すること、キャラクターの持っている弱さ、未熟さを描くことには最適なのです」

「ぼくの名前はズッキーニ」は初の長編作品だったが、世界最高峰のアニメの祭典、フランスのアヌシー国際アニメーション映画祭で16年、最優秀作品賞に輝いたほか、17年の米アカデミー賞の長編アニメーション賞にノミネートされるなど、世界中で高い評価を受けている。

「驚いている」と素直に喜ぶバラス監督だが、作っている最中は賞と結びつけるような考えは全く浮かばなかった。

「短編では、確かに賞は頭の中にあった。でも長編を作るに当たっては、純粋に子供に向けて社会問題をテーマにした作品を作りたい、より多くの子供たちに見てほしいという思いだけでした。賞をたくさんいただいたのは、予想もしていなかったことです」

ところで、主人公の愛称のズッキーニには、どういう意味があるのか。「もともと原作者のジル・パリスが母親からそう呼ばれていたらしい」と言いながら、こんな解説をしてくれた。

「フランス語でクルージュ (c o u r g e =カボチャやスカッシュの意味) というと、太っていて間抜けというイメージがある。これにエット (~ e t t e) がつくことで、かわいらしさが加わる。太っちゃとかわいらしさが合体した言葉なんです」(文化庁 藤井克郎)

クロード・バラス 1973年、スイス・シエール生まれ。フランス・リヨンのエコール・エミール・コール、スイス・ローザンヌ州立美術学校でCGなどを学ぶ。2006年の短編アニメ「魔法のラビオリ缶」が世界の数々の映画祭で受賞。16年、「ぼくの名前はズッキーニ」で長編監督デビューを果たす。「ぼくの名前はズッキーニ」は、2月10日から東京・新宿ピカデリー、恵比寿ガーデンシネマ、大阪・シネ・リーブル梅田、名古屋・ミッドランドスクエアシネマ、札幌シネマフロンティアなど全国順次公開。

主人公のズッキーニをミュージシャンの峯田和伸 (みねた・かずのぶ) (40)、カミューを女優の麻生久美子 (39)、レイモンをイラストレーターのリリー・フランキー (54) が演じる日本語吹き替え版の上映もある。

82歳アプリ開発者が国連で英語の講演 「高齢者が大切な役割を担う社会を」 産経新聞 2018年2月4日

若宮正子さん

高齢になってからスマートフォン向けのゲームアプリを開発したことで知られる若宮正子さん(82)＝神奈川県藤沢市＝が2日、高齢者とデジタル技術をテーマにした国連での会議で基調講演した。若宮さんは自分の経験を交え、デジタル技術を活用すれば高齢者もやりたい



ことができると思えるようになる」と訴えた。

若宮さんは英語で講演。物忘れをしがちな高齢者にカレンダーのアプリが便利であることや、離れて暮らす家族や友達とのやりとりにビデオ通話が役立つことなど高齢者から見たデジタル技術の利点を列挙した。

さらに、表計算ソフトを使って高齢者にも親しみやすい幾何学模様のデザインを考えたり、高齢者向けのアプリを開発したりしたことなど自分の活動を紹介。「どうすれば高齢者が元気で大切な役割を担い続ける社会をつくれるか、国連も考えてほしい」と話した。

若宮さんは80歳を過ぎてからアプリを開発。講演終了後、「多少緊張したが、言いたかったことはある程度通じたのでは。今後はデジタル技術になじめない人をサポートする活動がしたい」と話した。(ニューヨーク 共同)

厚生労働省 65歳以上も就労支援 生活困窮者に対応 毎日新聞 2018年2月4日

厚生労働省は、生活困窮者の就労支援に関し、65歳以上の人も対象とする方針を決めた。原則65歳未満としている年齢要件を撤廃する。少子高齢化による公的年金の給付水準低下や深刻な労働力不足への懸念を踏まえ、政府は高齢者が働き続けられる環境を整える方針で、生活困窮者にも同様に対応する。今年秋にも省令を改正する。

生活困窮者は、ひきこもりや長期失業者らを想定。最後のセーフティーネットである生活保護に至る前に支える仕組みとして、2015年4月に生活困窮者自立支援制度が始まった。「人とうまく話せるか不安」など、すぐには職探しが難しい人に、最長で1年間、自治体が農作業体験やパソコン講座、模擬面接など就労準備の機会を提供する。

当初は、働ける人の多い層を支援するため「65歳未満」の年齢要件を設けた。だが、就労経験が乏しいため年金額が少なく、生活が苦しい高齢の生活困窮者は多く、65歳以降も働きたいとの声が上がっていた。

政府は「働き方改革」の中で、「高齢者の就業促進」を打ち出した。昨年1月には65歳以上の人も雇用保険に加入できるようにした。公的年金の受け取り開始時期の選択を70歳超まで広げる方針も示している。

一方、生活保護制度では、働くのが難しいとの判断から65歳以上の受給者には就労を求めない自治体が多い。生活困窮者が65歳以降も働き続けるようになれば、高齢の生活保護受給者に対しても就労を求める自治体が増える可能性がある。【熊谷豪】

障害者と健常者 支え合う人形劇 22～25日に川崎で公演



東京新聞 2018年2月3日
人形劇「河の童」の練習中に、劇団員（手前右）の手話通訳で演出家の指示を受ける聴覚障害者の善岡修さん（右から2人目）＝川崎市中原区のデフ・パペットシアター・ひとみで

耳が不自由な人と健常者が支え合いながら活動する人形劇団「デフ・パペットシアター・ひとみ」が今月下旬、川崎市内で、分かり合えない河童（かっぱ）と人間の姿を描いた劇を上演する。二〇一六年に相模原市で起きた知的障害者殺傷事件に、同じ障害者として衝撃を受けた団員たちが、障害

者と健常者が共生できる社会のあり方を考えてもらおうと企画した。（山本哲正）

「子どもたちを見る動きを入れて」。先月上旬、川崎市にある劇団の稽古場。河童が村の子どもと相撲を取る場面で、河童の人形を操る耳の不自由な善岡修さん（42）に、演出担当者が手ぶりを交えて指示を出したが、それを補足するため、健常者の役者が手話で善岡さんに伝えた。

人形劇団の団員は、代表の善岡さんら九人。役者が人形を操りながら舞台上で演技するのが特徴だ。耳が不自由な役者は善岡さんら二人。相模原市の事件が起きたとき、善岡さんは、自らを被害者の立場に置き換え「(障害者の自分は) 殺される立場だった」と感じたという。劇団では障害者と健常者が助け合ってきたため、新たな公演のテーマを共生にしようと決め、原作に火野葦平(あしへい)さんの短編集「河童曼陀羅(まんだら)」を選んだ。河童が村人に追いやられる話があり、共に生きる大切さを考えるのに適していると思ったという。

劇団から脚本・演出を頼まれた宮崎県立芸術劇場演劇ディレクター立山ひろみさん(38)は、耳が不自由な役者二人の存在を作品に反映させた。その一人、榎本トオルさん(58)は家族の中で自分だけ耳が不自由で、六歳まで障害に気付いてもらえず孤独を感じた。立山さんはこの話を聞き、村の子どもたちの間で仲間外れにされて孤立する少女を登場させることにした。

作品「河の童ーかわのわっぱー」は、河童は村の子どもたちと遊び、日々を過ごしているが、干ばつが続くと村人たちは河童のせいにし、河童から見ると不可解な行動を取る、という話。耳の不自由な家族の中で育った善岡さんは「僕は河童に近い」と自身の立場を説明する。その上で「河童、そして同じ人間同士でも、立場によって物の見え方はさまざま。いろいろな角度から物語を楽しんでほしい」と話した。

公演は二十二～二十五日の午後二時から、川崎市幸区のソリッドスクエアB1ホール。二十三日のみ午後七時からもある。前売り大人三千円など。チケットぴあなどで販売中。当日三百円増。問い合わせはデフ・パペットシアター・ひとみ＝電044(777)2228＝へ。

<デフ・パペットシアター・ひとみ> 1980年、川崎市中原区の人形劇団ひとみ座からスタッフが移るなどして結成。同区に拠点を置き、全国で年間60回前後公演。人形劇の振興を図る公益財団法人現代人形劇センター(同区)によると、耳の不自由な人の人形劇団は国内では他にないという。83年、聴覚障害者による無言劇の祭典・国際デフ・パントマイムフェスティバル(チェコ・当時チェコスロバキア)で審査員賞を受賞。

旧優生保護法 強制不妊手術 新たに県内14人の資料 / 秋田

毎日新聞 2018年2月3日

旧優生保護法下で障害者へ強制的に不妊手術が行われ、宮城県の女性が国家賠償請求を起こした訴訟に関連し、県は2日、県内で強制不妊手術された可能性がある個人の名前などが記された資料が計14人分見つかったと発表した。県健康推進課によると、14人の内訳は男性5人、女性9人。年齢別では成人4人、未成年が10人だった。昨年12月下旬、不妊手術の適否を決めていた県優生保護審査会への申請書類3人分が見つかった。

メタボ健診、受けたら「キャッシュバック」 大阪府検討 朝日新聞 2018年2月4日

「メタボ健診」(特定健診)を受けた人に3千円程度の電子マネーを付与する――。大阪府がそんな制度を2019年度から始める方針を固めた。医療費を抑えて国民健康保険の負担減をめざすため、健康に努める人に「キャッシュバック」する。

大阪府によると、国保の被保険者が年1回のメタボ健診を受けると、3千円程度の電子マネーに交換できるポイントももらえる。健康マイレージシステムと名づけ、19年10月からの本格運用をめざす。ポイント制の健康増進策は岡山市などであるが、電子マネーに交換できる制度は都道府県では初めてという。

また専用アプリをダウンロードすれば1日5千歩以上でポイントがつき、ポイントがたまると抽選で3千円程度の電子マネーが当たる仕組みも検討中だ。18年度予算案にシステム開発費3億7千万円を計上する。

大阪府内の国保の被保険者でメタボ健診を受診した割合は29・9%と全国42位（15年度）。50歳以上では未受診者ほど医療費が高くなる傾向があるという。国保は被保険者で支え合う制度で、健康な人が増えれば保険料が下がるため、「健康を意識する人にキャッシュバックしよう」と考案した。大阪府の担当者は「生活習慣の改善のきっかけにしてもらいたい」と話す。

ポイント制の導入は国民健康保険法の改正がきっかけだ。現在は市町村が担う国保の運営に新年度から都道府県も加わり、保険料を統一できる。高齢化で医療費が増大し、現状のままでは40年度に府内の市町村間で年間19万円まで保険料の差が広がるという、府は保険料の統一を決めた。試算では22市町で保険料が下がり、21市町村で上がる。

ポイント制度は、保険料が上がる被保険者の負担感を減らす狙いもある。（太田成美）

社説:山形の「思いやり除雪」／東北全体に広げていきたい 河北新報 2018年2月4日

やってみれば意外に簡単なことでも、本気で取り組もうとはしない。「縦割り」の組織が絡むとなおさら、住民ニーズは顧みられることなく、部署と部署の隙間に押しやられてしまう。「お役所仕事」によくある話ではある。

除雪車の通過に伴い、玄関先や門口にうずたかく押し付けられる雪は、そうした役所の目からは見えにくい地域課題の典型と言える。

残された雪の山は、車に踏まれた圧雪が削り取られたものが多く、得てして硬く締まっていて、重い。かき分けて道路に出るのも一苦勞。高齢者にとっては、体にこたえる厄介者となる。市町村では通常、道路の除雪は建設課などが、高齢者の生活上の困りごとは福祉課などが、それぞれ受け持つことになっているのだろう。しかし、うまく連携が取れているという話はあまり聞かない。そこで雪の多い東北の自治体には新庄、寒河江両市のケースをぜひ参考にしてほしい。

両市は今冬、除雪車にスマートフォンを配備し、衛星利用測位システム（GPS）機能で効率的に運行を管理するシステムを導入。これに合わせて道路の雪を高齢者や障害者の家の前に押し付けない「思いやり除雪」を始めた。

東北他県では、除雪車が残していった雪の片付けをシルバー人材センターなどに依頼した場合、高齢者のみの世帯などを対象に費用の一部を補助する自治体もあるが、そもそも雪を押し付けないようにする試みは珍しい。

発案したのは市の道路課でも福祉課でもなく、運行管理システムを開発、販売した南陽市のソフトウェア会社だ。運行管理システムにあらかじめ登録した場所へ接近すると、アラームやメッセージが作動する機能を追加。除雪車が高齢者や障害者の家に近づくと、アラームなどでオペレーターに知らせて、雪を押し付けない操作を促す仕組みを作った。

事前に登録した「除雪弱者」は、寒河江市は要介護3以上の独居高齢者約80世帯、新庄市は独居高齢者や身体障害者の計約20世帯。寒河江市は市社会福祉協議会から、新庄市は市福祉事務所からそれぞれ情報提供を受けたという。

個人情報保護のため、除雪作業の受託業者に提供されるのは「場所の特定に必要な最低限の情報に限定」（新庄市都市整備課）されているという。

寒河江市によると、市内で1人暮らしをしている65歳以上の人は796人、要介護3以上の高齢者は1028人。ともに過去5年間で約4割も増加している。東北のほとんどの市町村は、ほぼ同じような傾向にあるはずだ。

雪国の苦勞を軽減していく努力は、高齢化が進む地域では重要な福祉政策であり、人口減少対策にもなり得る。豪雪に立ち向かう自治体の知恵が問われている。

【主張】介護報酬改定 抑制へ踏み込みが足りぬ

産経新聞 2018年2月4日

高齢化が進む現状において介護保険制度を持続させていくには、これまで以上にメリハ

リを利かせていくしかない。

4月からの介護報酬改定に問われていたのは、介護にかかる費用の伸びの抑制であった。ところが、焦点だった利用者宅での調理や掃除を行う生活支援サービスは若干の減額に終わるなど、踏み込み不足が否めない。

もはや、報酬の改定によって政策を誘導していくという手法は限界に来ている。

安倍晋三政権には、保険料徴収年齢の引き下げや大幅負担増、軽度者向けサービスの思い切った見直しといった抜本改革に、正面から取り組むよう求めたい。

今回の改定の最大の特徴は、自立支援を手厚くしたことだ。

通所介護（デイサービス）で、利用者の食事や歩行といった日常動作の状態が改善した場合、事業者に加算する仕組みを新設した。リハビリ専門職との連携による重度化防止の取り組みにも重点配分する。要介護度の改善する人が増えれば介護費用の抑制につながる。何よりも、身体能力の回復は利用者自身が望むことであろう。

狙いは妥当だが、こうした取り組みは時間がかかる。事業者が改善を見込めそうな軽度者ばかりを選んだり、成果を求めて過度にリハビリを行ったりする懸念もある。もっと直接的な抑制策を打ち出せなかったのか。

生活支援にはこれまで、安易な利用が多いとの指摘もあった。利用に上限を設けるべきだとの意見も出たが最終的には見送られた。代わりに、平均を大きく上回る利用について自治体がチェックし改善を図ることにしたが、どこまで実効性が上がるのか疑問だ。

生活支援で何とか暮らしを維持できている人がいるのは確かだ。だが介護財政の厳しさを考えれば、すべて保険で賄い続けることは難しい。民間サービスや自治体の事業、地域の支え合いなどで対応することもやむを得まい。

一方、介護保険制度の持続には慢性的な人手不足の解消も喫緊の課題である。介護報酬全体が6年ぶりのプラス改定となったのは待遇改善が必要とされたからだ。

にもかかわらず、今回の改定では介護職員の負担軽減策は目立たない。経営者にはプラス改定の趣旨を踏まえた対応を促したい。

「汚職事件」が「お食事券」、「学校へ行こう」は「学校閉校」、「強盗」は「碁打とう」…

西日本新聞 2018年02月03日

「汚職事件」が「お食事券」、「学校へ行こう」は「学校閉校」、「強盗」は「碁打とう」。パソコンや携帯メールの文章によく見る誤変換。つい噴き出してしまうこともある。「ゆかいな誤変換。」というサイトから“秀作”を紹介する▼「牧師さんの前で愛を誓います」→「ボク資産の前で愛を誓います」。つい本音が。「置いてかれる」→「老いて枯れる」。流行には置いていかれがち。「そんな感じ」→「損な幹事」。いつも押し付けられると損な感じ。「今日けんかした君」→「狂犬化した君」「今日中に返信します」→「狂獣に変身します」。君とはけんかしたくない▼笑うより感心してしまうものも。「敗者復活戦で敗退」→「歯医者復活せんで歯痛い」。「新社会人になった」→「新車灰塵（かいじん）になった」。「酒冷めたら来い」→「鮭鮫鱒鯉（さけさめたらこい）」▼こちらの誤変換は、出来が悪くて笑えない。岡山県議13人が提出した米国視察の報告書。内容の大半がほとんど同じだった。議員間で文章を使い回したようだ▼変換ミスまでそのままだったのが動かぬ証拠。「コレクション」とすべき部分が「これ区書」に、「作られたもので」は「作られ珠緒ので」になっていたという。インターネット百科事典を丸写しにした説明もあった▼地方議会の視察を巡り、公費の使い方がしばしば問題となっている。こんなありさまなら、公費の「ご返還」を、と言われよう。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

